

27th European Congress of Radiology (ECR 2015) (2)



中塚 智也

東邦大学医学部放射線医学講座 (佐倉)

2015年3月4~8日にかけてウィーン(オーストリア)で開催された第27回欧州放射線学会議(27th European Congress of Radiology: ECR 2015)に参加した。私の専門とする放射線医学では欧州最大の学会であり、欧州のみならずアジアを含む他の地域からも多数参加者のある学会である。

参加期間は終日曇っていたものの、雨に合うこともなく、比較的暖かく過ごしやすかった。会場近くを流れるドナウ川は雄大で、河畔を散歩すると春がすぐ近くまで来ていることが感じられるようであった。

私は、大学院生時代から変性疾患の画像診断を研究課題としており、当学会では「レビー小体型認知症における脳幹萎縮をフラクタル次元解析で評価する」という研究課題に沿った演題を発表した。本邦の学会で同手法を用いた演題に出会うことはまれであるが、欧州全体の学会となると近い領域での発表も見られ、大変刺激になった。今回はElectronic Presentation Online System (EPOS)というPC上で閲覧する発表形式を選んだ。EPOSは発表者の顔が直接見えないという欠点はあるが、多数の人間が自分のペースで発表内容をゆっくり閲覧することができるため、煩雑な内容を十分に理解してもらうという観点からは優れた発表方法であると感じた。

参加前は研究発表の場としての印象が強い学会であったが、教育展示も非常に充実していた。われわれの診療科は、多岐にわたる分野および疾患を対象とするため、日常臨床では比較的接することは少ないものの、熟知していなければならない専門知識が多々ある。各々の施設で撮像した画像を用い、詳細な説明を加えた綺麗な教育展示は、知識の習得および整理に大変役立った。

今回の学会では、佐倉病院中央放射線部に勤務する放射線技師の酒井亮介君と二人で参加した。診断に耐えうる画



学会会場 (Austria Center Vienna)



ホイリゲでの夕食会 (向かって一番左が筆者)

像を撮像するには放射線科医のみでは不可能で、放射線技師の尽力によるものが非常に大きい。この学会は、世界中の機器メーカーがこぞって最新機器 [computed

tomography (CT) や magnetic resonance imaging (MRI) 等] を展示する学会である。一緒に参加することで臨床や研究の動機づけになるとともに、普段はゆっくり話をする機会がないこともあり、一緒に時間を過ごすことは、職場における連帯感を強化するのに有用であった。

夜は、ウィーン郊外にあるホイリゲ（オーストリア東部に見られる自家製ワイン酒場を指す）で、東邦大学医療センター大森病院の甲田英一特任教授御夫妻、東邦大学医療センター大橋病院の五味達哉教授、鎌田憲子客員教授、長

谷川誠助教と夕食をご一緒させて頂いた。料理、ワインともに美味しく、楽しい時間を過ごした。東邦大学医療センターの3病院放射線科で親睦を深めるとともに、海外に不慣れな私にも懇切丁寧に学会参加のコツをご指導いただき、東邦大学で勤務できる喜びを強く感じた。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださいました東邦大学関係者の皆様にこの場を借りて深くお礼申し上げます。